しけるに、はしの上に唯圓教意、逆卽是順、自餘三教、逆順定故といふ文を誦する聲あり、たうとき事かなゝいかなる人の誦するならんと思ひて、ちかうよりてみれば白癩人なり、かたはらにゐて法文の事を云に、ちかひほと〳〵いひまはされけり、南北二京にこれほどの學生あらじ物をと思て、いづれの所に有てととひければ、此坂に候なりといひけり、後にたび〳〵尋けれど、たづねあはずしてやみにけり、もし化人にやありなんとおもひけり、

〔倭名類聚抄三病〕黃疸　病源論云、黃疸音旦、一云黃病、岐波無夜萬比、身體面目爪甲及小便、盡黃之病也、

〔箋注倭名類聚抄二病〕昌平本注首有疸字、下總本有下字、按說文、疸、黃病也、又醫心方引醫門方、黃病身體面目悉黃如橘、萬安方訓岐也万比、新撰字鏡、䶮也、彌支波牟、○略中原書黃疸候、身上有令字、及字在爪甲上、外臺秘要、醫心方並引、及字在小便上、與此同、原書無之病也三字、

〔伊呂波字類抄幾病瘡〕黃疸キハムヤマヒ　黃病同

〔增補下學集上二支體〕黃疸ワウダン

〔醫心方十〕治黃疸方第廿五

病源論云、黃疸之病、此由酒食過度、府藏不和、水穀相幷、積於脾胃、傷爲風濕所搏、瘀結不散、熱氣鬱蒸、故食已如飢、令身體面目爪甲及小便盡黃、而欲安臥、若渴而疸者、其病難治、疸而不渴、其病可治、發於陰部、其人必嘔、發於陽部、其人振寒而發熱也、

〔叢桂亭醫事小言四〕黃疸

古ヨリ五疸ト稱テ五ツニ分ツト雖、其方藥ハ必五法ニ非ズ、五疸トモニ兼テ治ス方多シ、左スレバ五疸ニ分ルモノハ紙上ノ談ナリ、八疸或ハ三十六疸、其外種々ノ名稱アリ、今是ヲ治スルニ緩急二ツアリ、急發ノモノハ皆治シヤスク、緩發ハ多ク治シニクシ、猶更年高ノ人ハ、半ハ鬼簿ヲ免レズ、緩發トハ常ニ惡寒シテ臥床スルニ及バヌ位ニ催スコト累日、小便微黃、日ヲ經テ漸濃クナ